

開会挨拶

黒川 清

内閣特別顧問、政策研究大学院大学教授、
日本学術会議前会長



イノベーションとは、新しい社会的な価値創造ということです。あたらしい技術や工夫そのもの自体がお金に結び付くとは限らないが、新しい経済成長のエンジンになる。後で述べるが、例えば WWW が導入されたのは 1992 年で、インターネットでつながり始めた世界はグローバルに「フラット」な時代になった。その 1 年前の 1991 年に冷戦が終わりソ連邦が無くなりグローバル市場経済が始まった。

一方で、地球の気候の温暖化、資源の問題、酸性雨などいろいろなことがあって、今までの産業構造による経済成長パターンは難しいという認識が出てきたのは、1962 年のレイチェル・カーソンの『サイレントスプリング』、続いて 1972 年にはローマクラブの「成長の限界」、87 年には国連で、“Sustainable development: Our Common Future” というブルントランド報告が出たが、ほとんど大きな転換行動は取られなかった。冷戦の最中、環境問題は二の次だったのだ。

しかし、冷戦が終わると、リオデジャネイロに世界の首脳が集まり、環境サミットが開催され「アジェンダ 21」とともに、21 世紀に向けて成長の限界を考えて、Sustainable Development を協議することになった。その 10 年後の 2002 年には、ヨハネスブルグで World summit for sustainable development (WSSD) が開かれた。ここでは小泉総理が、日本は途上国の教育について 1500 億円を出す用意があると表明されて、一昨年からユネスコで Decade of Education for Sustainable Development が始まった。一方で長年にわたって

I P C C が出していた成果の認知がアル・ゴア等の活動によって広がり国際政治のアジェンダにかなりなってきた、ここに去年のノーベル平和賞の意義がある。

1992 年から世界がつながった。WWW の後、ヤフーやアマゾン、イーベイが 94 年に創業している。そして、1997 年には廃業か吸収かを迫られたアップルが今、iPod で息を吹き

返している。Google は創業 10 年である。iPod には日本で試作品が作られ、台湾の会社が中国の工場で作っている部品もある。つまり、インテルのようにチップに特化して心臓部を押さえるという戦略でもなければ、良い物を作って競争するというだけでは勝てない世の中になっているのだ。ものだけでは中国はじめとした途上国が追いついてくる産業なのである、60 年代の日本がそうであったように。グローバル時代には強み Core competence に集中してこれを伸ばし、弱みは強いところとの協力 collaboration が基本である。

グローバル市場経済では貧富の格差が広がる。この課題はどうか。一昨年のノーベル平和賞は、バングラディシュの貧乏な女性を自立させたマイクロファイナンスのグラミンバンクと、それを作った社会起業家のユヌスさん。これもグローバル経済の対策の一つの在り方と言えよう。マイクロファイナンスはいまや世界の 60 カ国に広がっている。ほかに、NGO というボトムアップの活動、行動が起こり、広がっている。これが世界の動きだ。

5 月末に日本で開かれる T I C A D (アフリカ開発東京会議) はアフリカではよく知られた ODA プログラムであり、その 5 週間後には地球の温暖化や貧困の問題がテーマとなる G 8 サミットが開かれる。日本がどれだけ世界のリーダーシップを発揮できるか。国家の意思がなかなか見えてきていない。日本の提言「クールアース 50」も昨年の G 8 サミットで共有目標としてまとまったが、その後の具体的な政策が日本からは出てきていない。なぜなのか、一人ひとりがよく考えてほしい。